

日本の古典は外国語

英語で説明できる国文法

2023/09/14



古典を英語で説明

いま、小西甚一先生の著『古文研究法』など、古文の文法の解説を楽しく読んでいます — ということをメールやホームページで、たびたびご紹介してきました。特に、この本で面白いのは、古文の文法や語彙を解説するのに英語の単語や文法を使っていることです。この小西風手法によって、源氏物語や枕草子がまた、よく分かるのです。いまや、日本の古典は、れっきとした外国語なのです。そんなときには、英語が役に立つのです。我がことのように思う古典も、それなりの覚悟で読む必要があります。

うつくし 現代語の「美しい」とは、かならずしも一致しない。「かわいい」「かわいらしい」という意味がもとで、平安時代までの用例は、たいていそれである。「らうたし」と同様 *lovely* と英訳できる、その *love* という意味あいも、「うつくし」のほうが強いようである。それは、この語と同系統の「いつくしむ」（かわいがる）・「うつくしむ」（かわいがる）・「うつくしがる」（かわいく思う）・「うつくしげなり」（かわいらしい様子だ）などと比較してもわかるだろう。時としては *beautiful* と訳せる用例も出てくるが、この *beautiful* にあたる意味は、鎌倉時代より後に多いようである。「これなる松にうつくしき衣懸かれり」（謡曲「羽衣」）などは、あきらかに *beautiful* だけれど、「三寸ばかりなる人、いとうつくしくて居たり」（竹取物語）は、かわいい、つまりその相手をおかわいがりたくなるような感じである。言いかえると、平安時代以前は、主観的な性質が強く、鎌倉時代以後は客観的な傾向が著しいわけ。現代語の「うつくしい」に当たる語は「きよらなり」である。

【『古文研究法』 59頁】

なるほど、lovelyの方が beautifulよりも奥ゆかしい気がして、かぐや姫はまさに可愛らしくて、抱きしめて可愛がりたくなる気になり、まさに主観的に lovely です。

同時の「……ば」

また、昔から誤解を招いていた、接続助詞の「……ば」が、上に延べたことが下に言うこととたまたま同時あるいは引き続いておこる — といったような使い方があることについて、次のような説明があります。【『国文法ちかみち』413頁】

柿 くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺

"Because I am eatings some persimmons the bell of Horyuji Temple is heard." と理解したアメリカ人が、"Well, what about apples?" (ははあ、リンゴならどうですか) と質問したら、諸君はどう答えるか。あるいは子どもに「もし食べなかったら鐘は鳴らないの?」と訊かれたとき、どう返事するか。"In this context, you know, the particle "ba"(接続助詞の「ば」) dosen't correspond to "because" but it just indicates that two facts are going on at the same time. と答えたら、かのアメリカ人は、"Oh, you are a wonderful grammarian.(文法学者) Thank you so much." と感心するだろうし、柿をたべていると、ちょうど法隆寺の鐘が聞えてきたということなんだよ。と言っておけば、子どもならいちおう満足してくれるだろう。しかし、文法的答案として已然形を受ける接続助詞「ば」には、条件を示す用法のほかに、ふたつの事がらが同時におこっていることをあらわす用法がある。and then と訳する「ば」がある。と憶えておく方が賢明かもしれない。そうすると、

五月待つ 花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする (古今・巻三)

の「ば」も、まちがいなく解釈できよう。古くから、この歌は「花橘の香をかぐと、いつも昔の人の袖の香を思い出す」と解釈されてきたが、適切でない。平安時代の貴族は、香水のかわりに香を着物にたきこめていたが、人により好みがきまっていたから、したい間がらどうしなら「この香りはあの人」とすぐわかったわけ。ある日、ふと花橘の香りがしてきた。「おや、あの人香りだ」と思う、その瞬間的ななつかしさが、この歌の主題なのである。「昔の人」は、以前は恋仲だった相手。

また 同時の「……ば」

「……ば」が「同時」を現すことについては、次のような説明もあります。【『古文研究法』187頁】

山桜 わが見に来れば春霞 峯にも尾にも たちかくしつ (古今集)

がそれで、見にくるという事実と、春霞がいちめんに立ちこめているという事実とが、たまたま同時に存在しているのである。こんな時は、たいてい「……と」と訳しておけばよい。この用法について、佐伯梅友博士と私との間で、笑い話のような問答がかわされたことがある。

「唄をうたえば靴が鳴る」というけれど、それじゃ、うたわなかったら靴は鳴らないのか — といえば、そうでなく、やはり鳴るわけだね。
「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」というけれど、柿をたべなかったら鐘は鳴らないのかといえば、やはり、これも鳴るんでね。

唄をうたきという事実と靴が鳴るという事実がたまたま同時におこっており、柿をたべるといふ事実と鐘が鳴るといふ事実が同時におこっているわけなので、この用法は、現代語にも存在するのである。それから、現在の事実とはいちおう別に、こんな条件のもとではきっとこんな結果になるという常例の気持をあらわす「ば」がある。

年ふれは 齢（よわい）は老いぬ しかはあれど 花をし見れば もの思ひもなし
（古今集）

いま花を見ていなくてもかまわないのであって、花を見るという条件があれば、きっと心が晴ればれするといふ結果があることを述べているわけである。これも、訳語は「……と」でよいけれど、気持には「きっと」「いつもかならず」といふようなものがあるから、そのつもりで訳すること。

なるほど。納得。

古典と英語の親密さ

また、いつも、小西先生の古文の英語付きの説明を読んで感じるの、次の二つのことです。「いままでは古文は外国語だ」といふことと「昔の日本人は外国人と同じような感性持っていた」といふことです。例えば、小西先生は、次のように古文を説明します。【『国文法ちかみち』304頁】

英語の「完了形」(Perfecttense)の意味あいをよくのみこんでいただくと、古典語の「たり」「り」を理解するのにたいへんぐあいがよいのである。

- ① 事からの存続 (I have been in Paris for two years.)
梅の花さきたる園の青柳は かづらにすべく なりにけらずや
「さく」といふ事からが数日前に始まり、現在まで続いている。これからも続くと予想される。
- ② 不特定の過去における存続 (I have been to Paris before.)
春ごろ、鞍馬にこもりたり (更叔日記)
今年の春とか去年の春とか、はっきりした過去の時ではない。「ある年の春のころ」と訳する。
- ③ 結果の存続 (He has bought a car.)
酒・よぎものども持て来て、船に入れたり (土佐日記)
持ちこむという動作はすでに終わっているが、結果(酒や郡があること)は続いて存在する。
- ④ 現在ちかくまでの存続(He has just returned from U.S.)
あそび三人、いづくよりともなく出で来たり (更級日記)
出てくるため歩くという動作が現在のほんのしばらく前までおこなわれていたようだという気持。

現代語訳するばあい、①を「…… テイル」、②を「タコトガアル」もしくは「……タ」、③を「…… テアル」もしくは「…… タ」とすれば、だいたい適当だろう。

- きよらなり 形・動 美しい(pretty)。現代語の「うつくしい」に当たるのが中古語の「きよらなり」で、中古語の「うつくし」は現代語の「かわいらしい」(lovely)に当たる。

- おもしろし 形 ①魅力的だ(attractive)。②快適だ(pleasant)。③興味がある(interesting)。

など、などです。これで、「土佐日記」も「更級日記」もよく分かります — ほんとなかな？

助動詞「む」は英語の "will"

解釈するときに困る第一の問題は、日本語の助動詞のあつかい方にあります。例えば、助動詞「む」を勉強するとき、「む」には色々な使い方があって、その内容を区別するのに、「推量」「意志」「勧誘」「仮想」「婉曲」「適当」などなど、その時々々に色々な読み解かなければなりません。【『古文の読解』254頁】

をりあかし こよひは飲まむ ほととぎす 明けむ あしたは 鳴きわたらむぞ

とふたつの「む」は、どう訳したら良いのか惑(まど)います。

はじめの「飲まむ」は他の人たちに「飲もうぜ」と言ったのなら勧誘だし、自分で「飲もうかな」とつぶやいたのなら意志である。どちらであるかは、この歌だけでは決められない。次の「明けむあした」は連体修飾だが、歌意からいって「夜が明けるかどうか確かでないが、もし明けたなら」と仮想するのではおかしい。何億年来、いまだ夜が明けなかったというためしはない。だから、これは「明くるあした」でよいのを、柔らげて言うため、仮想めかして婉曲の用法を試みたものだろう。あとの「鳴きわたらむ」は、単純な推量。念のため、通釈しておく。

訳 今晚は徹夜で飲むことにしよう。(夏に入る) 明朝あたりは、ほととぎすが鳴いてくれるだろうから。

さてさて、古文の助動詞は、かくの如く複雑怪奇です。でも、小西先生は、「む」は英語の will (shall) だ、と切り捨てます。英語にして見れば良く分かります。

「明日雨ふらむ」	It will rain tomorrow.	推量
「明日、行かむ」	I will go tomorrow.	意志。
「あす来たまはむや」	Will you please come here tomorrow?	勧誘
「あす来たまはむや」	I hope you will call me omorrow.	婉曲
「そこに 夕餉を整へむには われは器どもをぞ 清めむ」	If you will cook the dinner, I will wash the dishese. 仮想	
「植(うえ)ん(む)」	I would like to plant.	希望

なるほど。簡明です。

英語によって強い推量と弱い推量を説明

「らし」が「あり」「けり」「なり」「かり」の連体形について連音変化をおこすと、「ある・らし→あらし」「ける・らし→けらし」「なる・らし→ならし」「かる・ら→からし」などとなる。発音のうえで変ったにすぎず、意味はもとの「あるらし」「けるらし」「なるらし」と同じことだから、解釈のときはそのつもりで訳せばよろしい。英語ならみな must be になるところ。【国文法ちかみち・334頁】

み吉野の吉野の宮は 山枯(から)し 貴くあらし 川枯(から)し清(きよ)けく あらし
(万葉・巻三)
桜花さきにけらしな あしひきの 山の峡(かひ)より見ゆる白雲 (古今・巻の一)

世のなかは かくのみならず 犬じもの 道に臥してや命すぎなむ (万葉・巻五)
秋の夜は 露こそことに寒からし 叢(くさむら)ごとに虫のわぶれば (古今・巻四)

「らし」の反対に、ごく自信のない推量が「めり」である。「らし」が must be なら、「めり」は it seems to me that のような気持であろう。

時代によって推量の拠り所が違う

推量の「らし」と「めり」の区別を英語でつけることを学びました。では、次のような歌からも、推量の「らし」と「めり」の区別を学ぶことができます。

自信のつよさということを中心にして、相反する性格をもつのが、推量の「らし」と「めり」である。「らし」は自信のある推量、「めり」は自信のない推量ということになるわけ。古文に出てくるときは、たいてい推量のよりどころが示されている。

竜田川 もみち葉ながる神南備(かむなびの)の 三室の山に時雨ふるらし
(古今・巻五)

「三室の山では、たしかに時雨がふっているらしい。その証拠に、竜田川には紅葉が流れてくる」というのである。

ふる雪は かつぞ消ぬらしあしひきの 山の激(たき)つ瀬 音まさるなり
(古今・巻六)

瀬音が高まって聞えるという事実から、山奥では雪が降るそばからどんどんとけているにちがいないと推量するのである。

「らし」と「めり」の意味はかなり違ったものだから、「めり」が「らし」にとって替ったのだと簡単に片づけるわけにはゆかない。むしろ、奈良時代の人たちはものごとをずばりと言うのが好きであったから、しぜん「らし」が多く用いられ、平安時代の人たちは、なるべく遠まわしに表現するのが上品だと思っていたから、ひかえめな「めり」が流行したのだというふうに考えるのが適切であろう。意味は、話し手があまり自分の意見を加えないで、外からながめているような感じの推量なのだが、これをびたりと訳し出す現代語がない。たぶん 現代人も、ずばりと言う方が好きなのであろう。しいて訳するなら、(……ヨウダ)(……ヨウデス)ぐらいのものではあるまいか。

なるほど、助動詞は複雑ですが、奈良時代の人と平安時代の人と現代の人とでは、相手の人に対する感じ方が違うので、言い方も、時代によって、さまざまな言い方が用意されているわけです。複雑な「心」や「思い」を、少しでも正確に伝えたくて、言葉は複雑になるのですね。言葉は、いつも、心に寄り添ってくれます。これを利用しない手はありません。助動詞の分析は、文学を正しく、豊かに、感動的に理解するためにはなくて叶わぬものです。

女性はすさまじいか

すさまじ 「すさまじ」と濁音によむ資料もあるけれど、一般的には「すきまし」だったろうと思う。形容詞の活用語尾はふつう清音であるばかりでなく、謡曲では各流ともかならずスサマシと発音していからである。いま「凄まじい」などいうのとはちがい、漢字の「冷」にあたる感じで、熱中できないような気分のときに使われる。

1 興味がわからない・気にくわない・つまらない。「すさまじきもの、昼ほゆる犬・春

の網代（あじろ：冬、水中に竹や木を編んで立て、魚を捕らえるしかけ）・三四月の紅梅の衣・児（ちご）の亡くなりたる産屋」（枕冊子）。

- 2 不景気だ・ぱっとしない。「設けなどしたりけれど、すさまじかりければ」（席のしたくなどしたのだが、シケていたので）（古今集）。
- 3 もの寂しい。「年くれてわがよふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな」（年末のいま、だんだん年をとってゆく自分のことを思うと、夜ふけの風の音を聞くにつけても、心のうちは何とさびしいことであろう）（紫式部日記）。

など、「風すさまじ」なんかいうときは、「風がはげしい」と訳したいところで、中世になると、そういう用法も有るが、中古の文章では、やはり「風がものさびしく吹く」というように訳すべきだろう。

そこで、小西先生は、またなんと、「すさまじ」の例文として『徒然草』から良からぬ文章を選びました。

すなほならずして拙（つた）なきものは、女なり。その心にしたがひてよく思われぬことは心うかるべし。されば、何かは女の恥かしからむ。もし賢女あらば、それも、ものうく、すさまじかりなむ。ただ迷ひを主としてかれにしたがふとき、やさしくもおもしろくも思ゆべきことなり。（徒然草二〇七段）

解 すなおでなく、ろくでなしなのは、女だ。こういう女の気に入るようにして、よく思われることがあるとしたら、それは情ないことだろう。何だって女に気がねなんかする必要はあるものか。もし賢い女があるとしたら、それは、したしみにくく、気にくわれないものにちがいない。ただ、迷いに占領されて、それに従っている間だけ、女がやさしくも魅力敵にも感じるはずのことなのである。

謹言居士の兼好法師ならでは、女性蔑視の意見です。女性崇拜の私には、縁のない言葉です。いえ、本当に。

「女の恥かしからむ」は、「女に対して気がねする必要があるか」の意。賢女といえば、りっはな女性のようなが、実際そんな人がいたとするなら、とてもおつきあいできませんな — という兼好の考えかたからいうと、世のなかにろくな女性はいないわけで、ただ「迷い」が男を占領している間だけ、女がりっばに見えるというのである。青年諸君にはちょっと同感しにくい論だろう。この場合は、対象としての女性に対して興味を感じる意で、to be interested in（興味深い）よりも to be attracted by（魅了させられる）のほうがないかと思う。

さすが、小西先生で、女性の魅力を兼好法師よりも、よく分かっておいです。それで照れ隠しのためにワザと英語を使って説明したのですね。

希望の助詞「ばや」は“Show me.”

助詞を使った希望の言いかたとして、「ばや」「なむ」「こそ」などがある。「ばや」は、もともと

心あてに 折らばや折らむ初霜の 置きまどはせる 白菊の花（折ルナラ折ロウ）
（古今・巻五）

のように、接続助詞「ば」に副助詞「や」がついて Subjunctive mood の気持であるのを「……む」と受けた言いかたから、下の「……む」にあたるものが省略されて生まれたのだと言われる。右の歌のばあいは、まだ希望の終助詞「ばや」になり切っていないが、

五月来ば 鳴きも古りなむ郭公（ほととぎす） まだしきほどの声を聞かばや
（ウブナ頃ノ声ヲ聞キタイ）（古今・巻三）

のように、「ばや」だけで言い切られることになる、説明としては「聞かばや」の下に「聞かむ」の気持ちが省略されているのだと言っても、文法的には希望の終助詞「ばや」が使われていると考えなくてはならない。

そこにこそ 多く集へたまふらめ。すこし見ばや。さてなむ、この厨子も 心よく開くべき。（スコシ ミタイナア）
（源氏「帯木」）

相手にむかって「見ばや」と言うと、自分の希望を述べるという形で頼むことになる。だから Arthur Waley はこの所を “But you too must have a large collection. Show me some of yours, and my desk will open to you with better will.” と訳している。「見ばや」を直訳すれば、“I want to see.” だが、場面を考えて、“Show me” と意識したのだろう。もちろん、“Show me” の方が適切である。

【国文法ちかみち：352頁】

『源氏物語』の英文翻訳者にも、国文法が大切なのです。

英語で文法用語の説明

譬喩（ひゆ：比喩）とは「たとえ」のことだ。「たとえ」が成立するためには、まず「たとえに使う事物」(vehicle：乗り物・伝達手段) がなくてはならず、それは何か「たとえられている意味内容」(tenor：歌手のテノール・大意・主旨) をもたずである。実例でいうと、「あの男は狐のようにずるい」における「狐」が vehicle で、その意味する内容「ずるい」が tenor である。このように、vehicle と tenor がはっきり示され、多くは「…… のようだ」「…… の如し」「…… に似たり」などの説明語を伴う比喩を「明喩」(simile) とよぶ。これに対して、vehicle だけが示され、tenor は表面に出ていない譬喩を、「暗喩」(metaphoer) という。「かの男は狐なり」は暗喩である。 【同：289頁】

譬喩の同類に、寓喩 (allegory:ぐうゆ) というのがある。これは、暗喩がさらに複雑化し、vehicle と tenor の関係がはっきりとは対応しないものをさす。さきの例と同じく狐でいうなら、「虎の威をかる狐」が寓喩である。「虎の威をかる狐」ぜんたいが vehicle で、その tenor は「えらい人の権勢を利用して威ばっているが、実力は無いずるいやつ」となる。 【同：291頁】

これで、譬喩と暗喩と寓意の意味と違いがすんなり分かります。論理的な英語の方が適格に限定して、明確な定義と意味を与えてくれるからです。このことから、言語の表現の仕組みの緻さは、世界共通であることが分かります。

駄洒落の宝庫 和歌

古文には、「掛詞」(かけことば) というのがあります。言ってみれば、駄洒落です。

吉野川 岩波たかく行く水の 早くそ人を 思ひそめてし (古今集・紀貫之)
解 上の「水の」に続くとき「早く」は fast の意味だが、下の「人を思ひそめてし」に続くときは early の意味でもある。このように、ひとつの語が同じ文のなかで違った意味に用いられているとき、それを掛詞とよぶ。

君をのみ 思ひこしちの白山は いつかは雲の 消ゆる時ある (古今集・宗岳大頼)

解 「思ひ来し」と「こしち」（越路）との掛詞。

春霞 たなびく野辺の若菜にも なりみてしかな 人もつむやと（古今集・藤原興風）
解「つむ」は「摘む」と「軋む」（つねる）の掛詞。合困り春霞がたなびく野原の若菜になってみたいなあ、人が摘み取って（つねって）くれやしないかと思って。

思へども 人目つつみの高ければ 彼（か）はと見ながら 得こそわたらね
（古今集・詠人しらず）

解「心にはあなたのことを思っているのだが、人目をはばかりるので、ちょうど堤が高いばあいのように、あの人は……と見ながら、思い切って川をわたるように行くことができない」という意味である。「包み」と「堤」および「彼は」と「川」の掛詞になっている。

今日わかれ 明日はあふみと思へども 夜やふけぬらむ 袖の露けき（古今集・紀利貞）
解 「近江」（あふみ）と「逢う身」の技巧。

陽炎の それかあらぬか春雨の ふるひとなれど 袖ぞぬれぬる（古今集：詠人しらず）
解「降る日と」と「古人」との技巧である。右の例は、ひとつの単語（文節）が「掛詞」。

夜も寒み 衣かりがね鳴くなべに 萩の下葉も 移ろひにけり（古今集・詠人しらず）
解 夜分になると寒いので、衣を借りたいようなこの頃、かりがね（雁）が鳴き、また同時に萩の下葉もすっかり色がわりしたことだ。

逢ふことは 雲居はるかになるかみの 音に聞きつつ 恋ひわたるかな
（古今集・紀貫之）

解 「はるかになる」と「なるかみ」（雷）の発音共通点がねらい。

君をのみ 思ひこしちの白山は いつかは雲の 消ゆる時ある（古今集・宗岳大頼）
解 「思ひ来し」と「こしち」（越路）との掛詞。

花の色は 移りにけりないたづらに 我が身世に経る 歎（なが）めせし間に
（古今集・小野小町）

解「いたづらに」が、「花の色はつまらないことに見るかげもなくなってしまった。わたし自身がつまらなく世のなかを過ごすというわけでぼんやりしていた間に……」といったようなぐあいに、同じ「いたづらに」が「移りにけりな」と「世に経る歎めせし」とを修飾する。

まことの苦しき恋も、このように掛詞によって冗談めかして隠しているのです。言葉は、正確にウソをいうのです。

では、私の新作掛詞冗句を一つ。

チョウは いつも 番（つが）い 舞麦

蝶々と番が掛詞です。蝶々はいつも「二頭」（にとう:蝶々は頭で数えます。羽根が多いので頭数で数えるのです）が連れ立って飛んでいます。サイコロ賭博で、偶数を「丁」（ちょう）といいます。「舞麦」とは「マイ・ストロー：maestro」です。

【2023/09/14 都築正道】